「週刊読書人」(平成29年10月13日)

郭玲玲著

中島文学における「己」の探究

綿密すぎるほどの作品の読み

先行研究論文についても検索作業を徹底

勝又　浩

中国人研究者による中島敦研究である。

単発の研究論文はかなり見ているが、単行本としては初めての例だと思われる。永年の中島文学ファンとしては、まずそのこと、外国人による中島研究の単行本が現れたという事実だけでも嬉しい。

著者は現在、山東農業大学准教授。後書きによれば大学時代に初めて中島敦を知り、以来、学士論文も修士論文も中島研究を通してきた。そして五年前、山口大学に留学、そこで博士論文としてまとめたのが本書であるという。この二百余ページは、概算十数年の研鑽の成果というわけである。

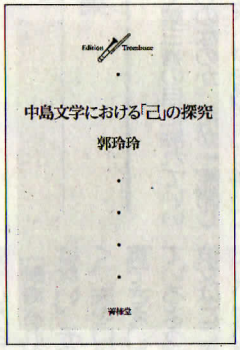
取り上げられている作品は「山月記」「光と風と夢」「わが西遊記」「名人伝」「弟子」の五編である。他にも柱になった作品との関連の範囲で初期作品などにも言及があるが、なぜか中島文学を代表する「李陵」、あるいは「虎狩り」など植民地時代の朝鮮を舞台にした作品についての言及がないのと、言及がないことについての弁も見当たらないのが気になった。そして、おそらくは博士論文という枠組み、形式をあまりにも固く守ろうとした結果なのであろう、読んでまず驚くのは先行研究論文についての徹底した検索作業である。先行研究などは、普通は自分の意見と抵触する範囲で、自説の補強や反証材料として取り上げるものだが、ここでは文献の紹介自体が目的となっている面が強い。それは、索引が無いのが残念だが、一面では現在の研究状況を知るための良い案内書の役割も果たしている。

著者のこうした綿密さは作品の読み方にも現れていて、たとえば「光と風と夢」とゴーガン「ノア・ノア」との細微にわたる比較などにはそれが良い結果をもたらしていると思われた。しかし「山月記」で言えば、よく比較される「人虎伝」、カフカ「変身」、ガーネット「狐になった夫人」、スティーブンスン「ジキル博士とハイド氏」等との比較で、「変身の原因」などは誰もが問題にするが、著者はそこにとどまらず、変身が突然急激であったか緩慢徐々であったか、さらに語り手が変身後の主人公を何と呼んでいるか等々の比較一覧表まで作成している。これらはちょうど、自説とは直接抵触しない文献まで徹底検証しているのと同じ、まことに遠回りな測鉛作業であると思われた。

もう一つ別の面を上げてみると、「弟子」論において、「子路のモデルである斗南先生」、あるいは「斗南先生をモデルとした子路」という断言がたびたび出てきて引っかかった。表現として正しくないし、言うならば〝子路像は斗南先生がモデルであってモデルではない〟のであって、著者には日本語のこの機微をこそ「考察」してほしいものだ。モデルだと断じてしまうから、子路は形式ばったことが嫌いであったのに、斗南先生は礼儀を重んずる人であった、その齟齬は何なのだろうかとして、当時の礼儀作法の書物まで探ってゆくような無用な問題に入り込む結果となっている。

そして、こうした密着平面思考は、まことに残念なことだが、それを理解するためにはあるところで思考のジャンプも必要な「名人伝」、ユーモアに溢れた、しかし中島敦の最後の到達点である「名人伝」が全く読めないという弱点に繋がっているだろう。著者も引いているように、硬骨漢であった子路は、その熱意にもかかわらず遂に「瑟」が「瑟」にならなかったが、この一冊のなかでも「名人伝」論ばかりは、超真面目な著者にとっての「子路の瑟」になっているように思われた。（かつまた・ひろし＝文芸評論家）

★かく・れいれい＝山東農業大学准教授・日本語教育。中国山東大大学院修士課程修了。山口大大学院博士課程修了。一九八一年生。



四六判・203頁・1600円
菁柿堂
978-4-434-23728-7
TEL. 03-5226-1161